森杲教授による書評へのリプライ

谷口明丈

森杲さんは、私に学問的刺激を一貫して与え続けてくださった先輩で、本書の執筆中も常に念頭に置いていた研究さった先輩で、本書の執筆中も常に念頭に置いていた研究的ません。しかも、その書評は、私の研究の研究史上の位置づけから始まり、本書の内容紹介、森さんが本書から得でもの、そして残された課題の提示へと続く、実に詳細かたもの、そして残された課題の提示へと続く、実に詳細かの丁寧なもので、大いに感激するとともに、裸にされたものの恐怖も感じざるをえなかったことを告白しておきます。

きの前提ともなる問題であるように思うからです。きの前提ともなる問題であるように思うからです。とかたいと思います。そのことは、個々の論点を議論するとみたいと思います。そのことは、個々の論点を議論するとみたいと思います。そのことは、個々の論点を議論するとみたいと思います。そのことは、個々の論点を議論するとの前提ともなる問題であるように思うからです。

一研究戦略

ていな

11

のは残念ですし、

森さんが提示された個々の論点を取り

紙幅の関係からその書評の全体が本誌に掲載され

「チャンドラーの研究戦略 (research strategy) が、アメ

せん。 なのでしょう。 ギャップを感じるのは、 は、 るもの、 0 トンの言葉が示しているように、 ible Production and American Industrialization,1880-1930," るのである」(Scranton, Philip, "Diversity in Diversity: Flex-追求しようとしたものであったとすれば、 Business History Review 65 研究が行われた時期に条件付けられているに違い より最近のジレンマと衰退によって条件付けられ 森さんが私の研究にある種の物足りなさ、 言い直せば、 問題意識が微妙に異なっているため 森さんと私の研究を条件付けて (Spring 1991)) というスクラン わたしたちの研究は、 私自信 あるい 0 ありま 7 仕 は 7 事 61

は 暗 たわ ドラーのアメリカ成功物語に強く影響を受けることになっ アメリカの成功についで日本の成功もはっきりと見えて 誰 V 私が研究生活を開始したのは一九七〇年代のはじめで、 資本主義の死滅よりも資本主義の成功のほうにリアリ けです。 の目にも明らかになりました。私はこの現実にも強く が が感じられはじめた時期でした。そのため、 忍び寄っており、 もちろん、 この時 一九八〇年代になるとその衰退 期にはすでにアメリカに チャ は

た

きないわけですが、 付けたものが何であったの 条件付けられることとなったのです。 それが私 か、 のものと全く同じということ 私には正確に知ることがで 森さんの研究を条件

1)

カ産業の主導力がその絶頂に近づいたときにその起

源

を

= 普遍と特 殊

は

あり得ないことでしょう。

出する史実に即して構成していくことを提唱されたの 批判され、 照基準として利用されました。 占形成史においてはレーニンの帝国主義論や宇野理論が 込むのは当然のことです。 主義の成立史においてはい が注がれたことは研究史の示すところです。その 本主義の特殊性の解明にアメリカ経済史学の研究者の心血 えればその国の個性の解明にそのエネルギーの多くを注 す。もちろん、一国史の研究が、 するのか、 番目の問題は、 わたしたち二人の間にある種のギャップを生じさせる二 (たとえば『アメリカ資本主義史論』ミネルヴァ書房、一九 アメリカ資本主義の特質をアメリカ的 その力点の置き方にかか アメリカの普遍性と特殊性のどちらを強 わゆる大塚史学のモデル わが国においても、 森さんはそのような方法を その国 わっていると思われ の特殊性、 アメリカ資 個性が表 言 が、 でし 資本 独 換 ま

L 質それ自体にこそ分析の手が入れられるべきだとおっ なものを生み出してくることになるアメリカ資本主義の特 す。 は、 識です。 な制度と価値を生み出したことによる、というのが 体現する普遍的なものに向いています。 やっているのだと思います。 それに対して私の関心は、二〇世紀アメリカ資本主義が 森さんはおそらく二〇世紀になってそのような普遍的 アメリカが二〇世紀を固有の歴史的時代とする普遍的 そのプロセスを描くことが本書の目的だったので アメリカの 私 成功 0 認

ていると考えます。 この点における両者のギャップは、 次の問題と深く関係

> リカに起こった。そのことを出発点にして一九六○年代に て書かれたものでした。 世紀転換期に歴史的な飛躍が アメ

り、この本は、その最初の部分に当たるものということに メリカ資本主義史を書いてみたいというのが私の希望であ 全盛期を迎え、二○世紀の末には衰退に向かう二○世紀

細に行っていますが、 したがって、飛躍のプロセスすなわち合同運動の分析は詳 それに続く過程で生み出されるというのが なります。二〇世紀アメリカ資本主義の特質はこの飛躍と なぜ合同運動が起こったのかとい 私の 理解です。

あっさりと説明されているにすぎません」。 点については、 するのか、 断絶を強調するのか、ここでも、 森さんも言っておられたように、「至極 森さんと私 連続性 を重 視

う

Ξ

力的 紀 本主義と二〇世紀資本主義の断絶面を強調する意図をもっ るように思われます。 リカ資本主義の連続的な側面を強調したいと考えておられ 森さんは二〇世紀アメリカ資本主義の特質を、 な特質と関連づけて理解したい、 や植民地期以来のアメリカ資本主義の展開のアメリ それに対して私の本は、 V いかえれば、 一九世紀資 九世 アメ

> 兀 ミクロとマクロ

間

にギャップが生まれているのかもしれません。

「巨大企業に焦点をあててこの時 うに思います。森さんは次のように述べておられ つの問題として、い わたしたち二人の間にギャップを生じさせているもう一 目的で書かれた本書は、 わゆるミクロとマクロ 私 期 (森さん) 0 画 期 性 の読み方からす 0 を明ら 問 題 が か ま あ にす す。

礎という視点から見るならば、二○世紀アメリカ資本主義 基礎を得たいというのが私の望みでした。このミクロ的 新たな人間と人間 クロ 用いています。したがって、それ自体は、企業すなわちミ さんが大きな不満を持たれるのは当然といえるでしょう。 の衰退は一九七〇年代以降ということになり、 とによって、マクロ的現象すなわち社会経済史を理解する と考えています。 葉が見つけられず、苦肉の策といったところがあるのです モデル」の社会関係という概念の広がりのなさを批判され はずです、と。 の大恐慌は素通りしてしまうことになります。この点に森 いってもよいかもしれません。二〇世紀巨大企業にお における人びとの関係をも根底において規定していくもの ているように思います。社会関係という用語は、 でなく、社会経済史的な歴史記述と切り結ばざるをえない 以上、森さんが私の本の書評を書きながら感じられた における関係を概念化したものですが、それは、 企業における人間と人間の関係を意味する言葉として そして、私の「生産力システム―社会関係 マクロのミクロ・ファウンデーションと の関係の発生を明らかにしたい、 一九二九年 適切な言 そのこ 社会 ける

て議論を深めていかなければならないと思っています。で、まり豊かな歴史認識が生み出されていくももちろんなく、このギャップを理解し、それを埋めていくものだと思います。そのためにも、森さんが提起されながらのだと思います。そのためにも、森さんが提起されながらいだと思います。そのだめにも、森さんが提起されながらいたと思います。そのだめにも、森さんが提起されながらいだと思います。そのだめにも、森さんが提起されながらいたと思っています。

たにぐち あきたけ・東北大学大学院経済学研究科教授)

れば、最終的にはいわゆる経営史の枠内で解明が終わるの